

L'OCCITANE
EN PROVENCE

SUSTAINABILITY

NEWSLETTER

8

2026 / Vol.9



その一歩が未来を変える。

6月はロクシタンのサステナ月間

ロクシタンでは世界環境デーのある6月を「サステナ月間」として定め、1ヶ月を通じて、チャリティーアクション「RACE FOR SUSTAINABILITY」をはじめ、環境や社会課題について考え、行動につなげるさまざまな取り組みを展開しました。限りある資源の大切さを啓蒙する「100万人のキャンドルナイト」、自然との共生を目指す「オイスカ富士山の森づくり育林ボランティア」、地域の環境保全につながるビーチクリーン活動など、多くの社員が一步を踏み出し、サステナビリティへの想いを形にしています。一方で、世界では今、かつてないスピードで種の絶滅が進行しており、生物多様性の保全は私たちにとって重要な課題です。今号では、こうした活動の報告とともに、未来の自然と人々の暮らしを守るために私たちができることをお届けします。



ロクシタンサステナ月間 / チャリティーアクション RACE FOR SUSTAINABILITY /
L'OCCITANE CLEAN WALK / オイスカ 富士山の森づくり /
Present Tree® in くまもと山都 / ビーチクリーン活動報告 / 加速する種の絶滅



SUSTAINABILITY MONTH

その一步が未来を変える。

創設以来、人や自然を守る活動に取り組み、早くからサステナビリティの大切さを発信し続けてきたロクシタン。「サステナ月間」とは、地球や自然、そして未来のためにできることを改めて考え、行動につなげていくことを目的とした取り組みです。ロクシタンでは国連が定める6月5日世界環境デーのある毎年6月に実施し、さまざまな情報発信や企画を通じて、社員だけでなくお客さまとともにサステナビリティへの理解と共感を広げました。



お客様参加型チャリティーアクション

RACE FOR SUSTAINABILITY

サステナ月間5年目となる今年は、昨年に引き続き、メインコンテンツとして「RACE FOR SUSTAINABILITY」を実施しました。参加者の移動した距離に応じて、ロクシタンが継続的に支援している熊本県山都町へ最大2,500本の植樹を行うお客様参加型のチャリティーアクションです。

これは、ロクシタンが社内向けに毎年実施するチャリティーイベントから生まれた企画。ロクシタンでは、全世界の社員が走るなど動いた運動量を専用アプリでポイント化し寄付金を決定する社内向けグローバルチャリティーイベントを2016年から実施。全世界の社員が運動を楽しみながらチャリティーに参加できる仕組みを作っています。

このイベントをお客様にも広げたいという思いから、昨年のサステナ月間から、みなさんの移動した距離に応じて寄付をする「RACE FOR SUSTAINABILITY」を実施しました。昨年は8,577人が参加くださり、総移動距離が7.6万km、総額760万円をNPO団体へ寄付し、1,688本の苗木を植樹しました。今年も6月の一か月間、ロクシタンサステナ月間の特設サイトにご自身の毎日の移動距離を入力いただくだけで、自然を守る活動につながるキャンペーンの実施となりました。非常に多くの方にご参加いただき、今年は2,216本の樹を来春山都町に寄贈出来る結果となりました。改めてご参加下さった皆様、本当にありがとうございました。



L'OCCITANE CLEAN WALK

with



「RACE FOR SUSTAINABILITY」の活動の一環として6/7(日)にゴミ拾いをしながら歩くチャリティイベント「L'OCCITANE CLEAN WALK」を東京・恵比寿で開催。子供から大人まで、ロクシタンカラーの黄色いビブスを着用した参加者146人が恵比寿周辺を歩きながらゴミを回収しました。

有志で街の清掃を行うNPO法人「グリーンバード」とコラボレーションしたチャリティウォーキングイベントでは、開会式でロクシタンの想いやクリーンウォークイベント企画の背景をお伝えした後、当日参加した146人が10人程度のグループに分かれ、恵比寿・中目黒・目黒駅周辺を回りました。歩道の垣根の間などを中心に各チーム街中のゴミを拾い歩き、会場には大量のゴミを持って帰ってきました。

最新の研究では毎分40トンものプラスチックごみが海に流れ出ているといわれていますが、この日の活動によって街から海へゴミが流出することを防ぐことに貢献できました。参加された皆様もこの社会課題についてより身近な問題だと捉え、環境に対する意識がさらに向上されていました。



代表取締役社長 山本直樹より開会の挨拶



会場から街に向かって出発



垣根に隠れたゴミも見逃さない



富士山の森づくり

公益財団法人オイスカ 育林ボランティア

日本人の心のふるさととして、古くから親しまれてきた富士山。しかし、富士山の森の一部では病虫害などにより豊かな森林や生態系が失われつつあり、大きな課題となっています。こうした状況を受け、公益財団法人オイスカは「100年後の未来に豊かな森を残す」を目標に、多様な企業や団体と連携しながら森づくり活動を推進しています。

ロクシタンは、CSR活動理念「ロクシタンの約束」に掲げる「植物の多様性を保護する」という価値観のもと、2023年から富士山麓の育林プロジェクト「富士山の森づくり」を継続的に支援しています。今年も社員ボランティアによる活動支援を通じて、未来へ豊かな森をつなぐ取り組みに参加し、生物多様性に富んだ強い森を目指す活動に貢献しました。



全社ボランティアデーとして96名が参加

これまで本活動は有志メンバーを中心に参加してきましたが、より多くの社員に自然と向き合い、環境課題を自分ごととして捉えてもらうことを目的に、今年はオフィススタッフを対象とした全社ボランティアデーとして実施しました。当日は96名が参加し、富士山の森の現状や育林の重要性について学ぶ貴重な機会となりました。

しかし当日は、ダブル台風の接近による悪天候に見舞われ、本来予定していた育林作業を行うことができませんでした。そこでオイスカの皆さまのご協力のもと、「雨の日プログラム」に切り替えて活動を実施しました。

まず座学として、富士山の森が抱える課題や、なぜ育林が必要なのか、そして国産材を活用することが森林保全につながる理由について学びました。森が適切に手入れされることで生物多様性が守られ、水源涵養(森林が育む豊かな土壌が雨や雪を地下水として蓄え、浄化してゆっくり川へ流す働きのこと)や土砂災害の防止など、私たちの暮らしを支える重要な役割を果たしていることを改めて理解しました。

講演を担当下さった公益財団法人オイスカ 菅原様





続いて、実際に森の中を歩く予定だった育林サイトの見学を実施。悪天候のためバス車内からとなりましたが、オイスカの担当者による解説を聞きながら、これまで植樹や除伐、下刈りなど植えた木の成長を促す作業が行われてきた現場を視察しました。森が長い年月をかけて再生していく過程や、継続的な手入れの重要性について学び、森づくりが一朝一夕では実現できない長期的な取り組みであることを実感しました。

最後は、間伐材を活用した「リングツリー作り」に挑戦しました。実際に木に触れ、手を動かしながら作品を作ることで、森からいただく資源の価値や自然とのつながりを身近に感じる時間となりました。参加者からは、「森について初めて深く学ぶことができた」「普段使う木製品の背景にある森林の循環を意識するきっかけになった」といった声も聞かれました。

今回の活動は、天候の影響により予定していた育林作業こそ実施できませんでしたが、森について“知り、考え、つながる”機会となりました。ロクシタンはこれからもオイスカとのパートナーシップのもと、「富士山の森づくり」を継続的に支援し、豊かな自然環境を未来へつないでいきます。未来の森を育むためには、一人ひとりの理解と行動の積み重ねが欠かせません。この日の学びと体験が、その第一歩となることを願っています。





Present Tree® in くまもと山都

未来へつなぐ森づくり

熊本県山都町で6年目の植樹活動を実施

ロクシタンは「植物の多様性を保護」の約束のもと、2026年4月、熊本県山都町で森林再生活動の一環として植樹を実施しました。2021年から継続している本プロジェクトは今年で6年目を迎え、今回新たに1,688本の苗木を寄贈。これまでの累計植樹本数は6,874本、植栽面積は約2.75ヘクタールとなり、豊かな生態系を育む森づくりへの支援を着実に広げています。

ロクシタンは創設以来、自然の恵みを活かした製品づくりとともに、自然環境や地域社会を守る活動を継続してきました。その取り組みの一つとして、日本では認定NPO法人環境リレーションズ研究所が推進する「Present Tree® in くまもと山都」を支援しています。

山都町は、「SDGs未来都市」に選定されるなど持続可能なまちづくりを推進している地域です。また、特別天然記念物であるニホンカモシカをはじめとする多様な生きものが生息する、生物多様性豊かな環境を有しています。一方で、過去の自然災害などの影響により森林の一部が失われており、地域の生態系を未来へ引き継ぐための森林再生活動が求められています。

4月19日に開催された植樹イベントには、自治体関係者や地元住民、高校生、一般参加者、ロクシタン社員など約80名が参加しました。参加者はヤマザクラやコナラなど、この土地の自然環境に適した広葉樹の苗木を一本ずつ丁寧に植樹。森林の再生だけでなく、白糸台地の美しい景観やそこに暮らす多様な生物を未来へつなぐ想いを共有しました。

今回寄贈した苗木は、昨年実施したサステナ月間の取り組み「Race for Sustainability」で集まった寄付金を活用して購入されたものです。一人ひとりのアクションが、森林再生へとつながる象徴的な取り組みとなりました。6年間にわたり継続してきた活動の成果は、植樹地にも表れています。2021年に植えられた苗木の中には高さ2メートルを超えるものもあり、かつての伐採地には緑が広がり始めています。森づくりは一朝一夕で実現できるものではありませんが、毎年の積み重ねが着実に自然環境の回復へとつながっています。



恵みの雨の中での植樹活動





また、メゾン創設50周年を迎えた今年は、この継続的な活動の証として植栽地に記念プレートも設置されました。山都町、環境リレーションズ研究所、ロクシタンの三者が協力しながら育ててきた森への感謝と、未来の世代へ豊かな自然を引き継ぐ決意が込められています。

ロクシタンはこれからも、「植物の多様性を保護する」というCSR活動理念のもと、自然と人が共生する社会の実現に向けて、地域とともに持続可能な森づくりを支援していきます。

最後に、この度の熊本地震により被災された皆様、ならびにそのご家族の皆様にお見舞い申し上げます。皆様の安全と被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。被災された皆様の生活が1日も早く平穏に復することをお祈り申し上げます。





ビーチクリーン部 活動報告

海を守る一歩を、未来へつなぐ。

ロクシタンでは、自然への感謝を行動で示す取り組みのひとつとして、4月に大磯・照ヶ崎、5月に鎌倉・由比ガ浜にてビーチクリーン活動を実施しました。大磯では、海流によって運ばれてきた漂着ごみに加え、釣り糸やルアーなど浜辺で発生したごみも多く見られました。中にはトイレの蓋といった大きさがある大型プラスチックごみも回収。プラスチックは自然界で分解されることがほとんどなく、人の手で回収されなければ数百年にわたり残り続けるといわれています。さらに細かく碎かれることでマイクロプラスチックとなり、海洋生態系への影響も懸念されています。海岸に打ち上げられたごみを目の当たりにし、ビーチクリーンの重要性を改めて実感する機会となりました。

ゴミの回収量

燃えるゴミ	合計 7.5kg
燃えないゴミ	合計 12.8 kg



(左)漂流されて風化したトイレの蓋
(下)大量のゴミを回収



5月の由比ヶ浜では、快晴のもと活動を実施しました。海水浴シーズンが始まり、多くの人で賑わう浜辺には、比較的きれいな状態のペットボトルやお菓子の包装など、利用者によって生み出されたと思われるごみが散見されました。私たちは自然の恵みを受けながら海を楽しんでいます。その豊かな環境を未来へ引き継ぐためには、一人ひとりが責任を持って行動することが大切です。ごみを拾うという小さな行動も、海洋プラスチック問題の解決や美しい海岸の保全につながります。これからもロクシタンジャポンは、自然への敬意と感謝を胸に、地域とともに環境保全活動を継続していきます。未来の海を守るために、一歩ずつ行動を積み重ねていきたいと考えています。

ゴミの回収量

燃えるゴミ 合計 5.59kg

燃えないゴミ 合計 2.93 kg





加速する種の絶滅

生物多様性の危機は、私たちの暮らしの危機

私たちの身の回りには、数えきれないほどの生きものが存在し、それぞれがつながり合いながら地球の豊かな生態系を支えています。しかし今、その生物多様性がかつてないスピードで失われています。世界自然保護基金（WWF）の報告によると、1970年から2018年までの約50年間で、世界の野生生物の個体数は平均69%減少したとされています。これは単に動物や植物が減っているという話ではありません。私たち人間の生活を支える生態系そのものが弱まりつつあることを意味しています。

国連の生物多様性および生態系サービスに関する政府間科学・政策プラットフォーム（IPBES）は、現在100万種以上の動植物が絶滅の危機にあると警告しています。種の絶滅速度は本来の自然なペースの数百倍から千倍に達するとされ、地球史上でも極めて異例の状況です。なかでも深刻なのが、淡水域や熱帯地域の生態系です。川や湖に生息する生物は大幅に減少し、南北アメリカの熱帯地域では野生生物の個体数が90%以上減少したという調査結果もあります。また、植物の約40%が絶滅の危機にあるとされ、昆虫についても将来的な大幅減少が懸念されています。





こうした生物多様性の損失を引き起こしている主な原因は、人間活動による生息地の破壊です。森林伐採や農地拡大、都市開発、過剰な資源利用に加え、気候変動も生きものたちに大きな影響を与えています。気温上昇や異常気象によって、生息環境そのものが失われるケースも増えています。しかし、生物多様性は単なる「自然の豊かさ」ではありません。私たちの暮らしを根底から支える重要な基盤です。例えば、農作物の受粉を担う昆虫や鳥類、肥沃な土壌をつくる微生物、豊かな漁場を支える海の生態系など、食料生産の多くは自然の働きに支えられています。また、森林は大気中の二酸化炭素を吸収し、水を蓄え、気候を安定させる重要な役割を果たしています。さらに、多くの医薬品の原料は植物や生物由来であり、生物多様性は私たちの健康や経済活動とも深く結びついています。



もし生物多様性の損失が進めば、食料や水資源の確保が難しくなるだけでなく、自然災害や感染症リスクの増加など、私たちの生活にも大きな影響が及ぶ可能性があります。では、私たちにはできることは何でしょうか。

一つは、日々の消費行動を見直すことです。持続可能な方法で生産された食品や製品を選ぶこと、食品ロスを減らすこと、環境認証製品を活用することは、生物多様性の保全につながります。



また、森林保全や海洋保全活動への参加や支援も重要です。さらに、気候変動対策も欠かせません。省エネルギーの実践や再生可能エネルギーの利用、環境負荷の少ない移動手段の選択は、気候変動の抑制と生物多様性保全の両方に貢献します。

英国の自然史学者デイビッド・アッテンボロー氏は、「私たちが自然を大切にすれば、自然も私たちを大切にしてくれる」と語っています。生物多様性の危機は決して遠い国や森の中だけの問題ではありません。私たち一人ひとりの暮らしや未来と深く関わる課題です。未来の世代へ豊かな自然を引き継ぐために、今できる小さな行動から始めてみませんか。

